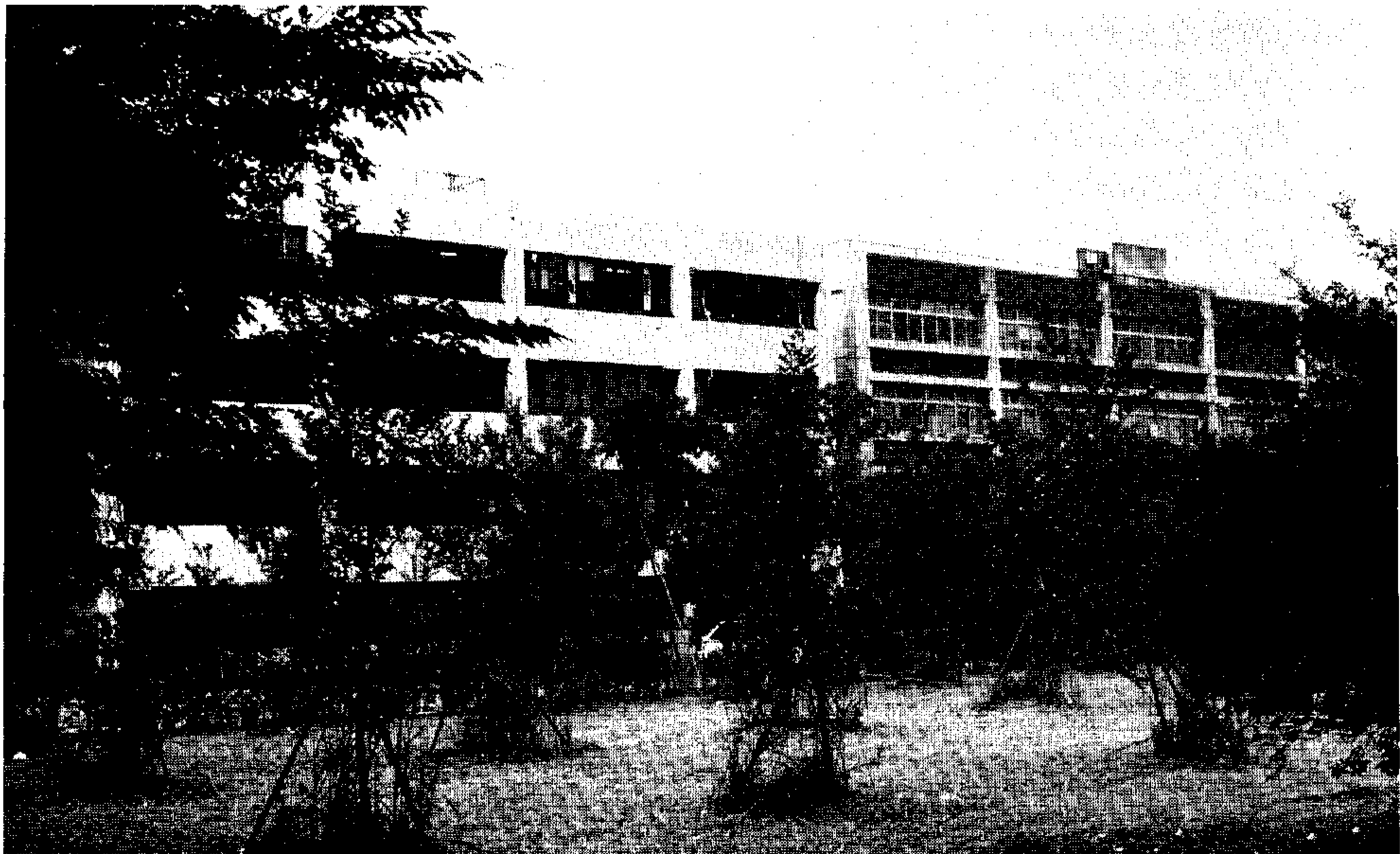


埼玉大学電気・電子工学科 同窓会会報

さい久流

Vol. 6



電気・電子棟

平成 6 年 6 月 発行

埼玉大学電気・電子工学科同窓会

〒338 浦和市下大久保255

TEL. 048-852-2111 (内線4490)

FAX. 048-855-0940

(印刷 雄文社)

さいくる Vol. 6 発行にあたって

会長 村田昌市（電気73年度）

会員の皆様お元気で御活躍の事とお喜び申し上げます。同窓会発足25周年を契機に会報を毎年発行する形式にして早いもので3年が経過し、ここに「さいくるVol.6」をお送りできる事大変喜ばしく思います。

さて、バブル経済崩壊後の景気は長期低迷から脱しきれず戦後最長を記録するのではないかとまで言われていますが、早期の回復を期待したいものです。一方我が同窓会は会員数も毎年増え活動は十分とは言えないまでも継続しており、今後も細くとも息の長い活力のあるものでありたいと考えています。

私事で恐縮ですが、昨年6月わが家に米国の女子中学生を1週間預かるホストファミリーとしての機会を得ました。ホストファミリーの話は市の広報で知り、これは一昨年市の中学生10数人があの“ふるさと創生資金”事業の一環として夏休みに米国オハイオ州の小さな町を訪問した事に対して、米国より日本を訪問するとの事でした。最初私が応募しようとした話しを持ち出すと、家族（わが家にも中学生の娘がいます）は「英語が話せない」「食事はどうするの?」「日本の布団に寝られないのではないか」等の不安材料を並べ反対されたものでした。結局わずかなお金で子供達（小中学生の2人）はもちろん大人も異文化に触れる事ができる機会をとの理由で応募しました。結果はホストファミリー（全部で15家族）に選ばれましたが、受け入れ準備の為の1ヶ月は期待と不安（オーバー?）の日々でした。その間子供達は日本語を教える代わりに英語を習おうとか、折り紙を教えるとか、トランプをする等、妻は部屋の掃除、食事の献立、基本的な日常会話を覚える等準備をしていましたが、実際は思い通りにはいかないもののジェスチャーを主体にした会話で何とか無事に、しかしあっという間に1週間が経過しました。離日前日には少しばかりのお土産を渡しお別れの夕食会をしましたが、短いながらもお互いの気持ちが通じたのが、彼女はいま少し日本にいたいと言うし、家族全員当初の

不安もすっかり消えてもっと日本に居てほしい、また日本に来てほしいとの話しになり最後は涙を浮かべる場面もありました。

紙面の都合上詳細は割愛しますが、この体験を通じて家族が感じた事は“案ずるより産むが易”（まず行動する）“人は言葉より気持ちで通じるもの”（次に真心）“今回の接点を大事にし、今後も継続していく”（そして細く長く）というものでした。その後娘は文通を続けているようですが、本当の気持ちはいつしか再会をと思っているようです。

本同窓会も肩ひじ張らずだれでも参加でき、その輪が大きく広がっていくよう会員の皆様の協力を期待しているしだいで。

■学内トピックス■

昨年から今年にかけてキャンパス内の景観が大きく変化しました。かねてから情報工学科棟の南側に接して建設中だった理工学研究科の大学院棟が、昨年の暮れに完成しました。これは7階建ての建物で、1階はロビーと学生掲示板、2階は工学部、理工学研究科の事務局、3階以上は大学院関係の研究室となっています。また図書館と理学部間の旧バスロータリ部分に池と小川と大理石作りのステージが作られ、学生の憩いの場所になっています。

工学部では今年行われた工学部長選挙で、森末先生が再任され、引き続き工学部長として学部の重要課題にあたられることになりました。

大学院博士課程に第4番目の大専攻として、新たに情報数理科学専攻が開設されました。これは3つの大講座（数理科学、電子情報、情報システム）から成り、電気系の先生方も多数この専攻の教官を兼任することになりました。

大学と企業との新しい共同研究体制を目指して、埼玉大学に地域共同研究センターが設置されました。このスタッフとして電気電子工学科からも電子回路研究室の高橋先生が移籍されました。

電気電子工学科内でも、昨年度いっぱい電力研究室の佐藤先生が定年退官なされました。また同窓生でもある小林信一先生が教授に昇任されました。小林先生は今年の6月から文部省の在来研究員として英国バーミンガムのアストン大学へ10ヶ月の予定で出張されました。

金子裕良（電気87年度、電気修89年度）

連載 会員だより

▶▶▶ その3

1 回生の誇りと苦勞

コスモ技研株式会社 代表取締役社長
第1期生 河合勝弘
(電気66年度)

昭和38年7月に埼玉大学に工学部が新設され、電気工学科に38人が実質10倍以上の競争率で入試が行われました。私も浪人を覚悟し、今で言えばフリーターとして仕事場から受験、同期の人達もそれぞれの事情があった特異な連中ばかり、1回生の仲間は東大、早稲田を目指していたと聞き、私の出身は静岡県立浜松北高校ですが同じく埼大受験し落ちた友が翌年東北大学工学部に合格したことを聞いたり、結局私などはたまたま運が良く、最低の成績で合格したのだと思う次第です。

あこがれの大学生活と言えども、当時は北浦和駅前の文理学部構内に間借り生活、工学部の伝統は現在の下大久保に新校舎ができてからで、黒沢先生、角先生、森末先生、中川先生などの工学部作りのご苦勞は、並大抵ではなかったと推察しています。

ところが学生(我々)は自由勝手、当時は学生運動あり、授業サボりあり、一方では一部の優秀な学生は講義に疑問(私には無縁)を感じ反抗?したり。

とにかくこんな生徒達に卒論研究をさせ、社会に送り出したのだから先生方は立派です。今では関東に埼大工学部あり、就職も引き手あまたですが、当時は先生の方が就職活動をなさったと聞きます。

したがって卒業後も1回生は公私に渡り、事ある毎に先生方に心配をかけている筈ですが、逆に我々は独立独歩していると自負しているのだと思います。1回生の中には、当初の就職先から離れ、今の職業が司法書士、考古学者、学習塾経営、教授、講師など電気工学科卒業生とは推定しにくい進路の一例です。さらに大企業から小企業まで含めて社長業も6名います。

「会員便り」なので私事を紹介します。従業員数名のコスモ技研株式会社代表取締役が今の

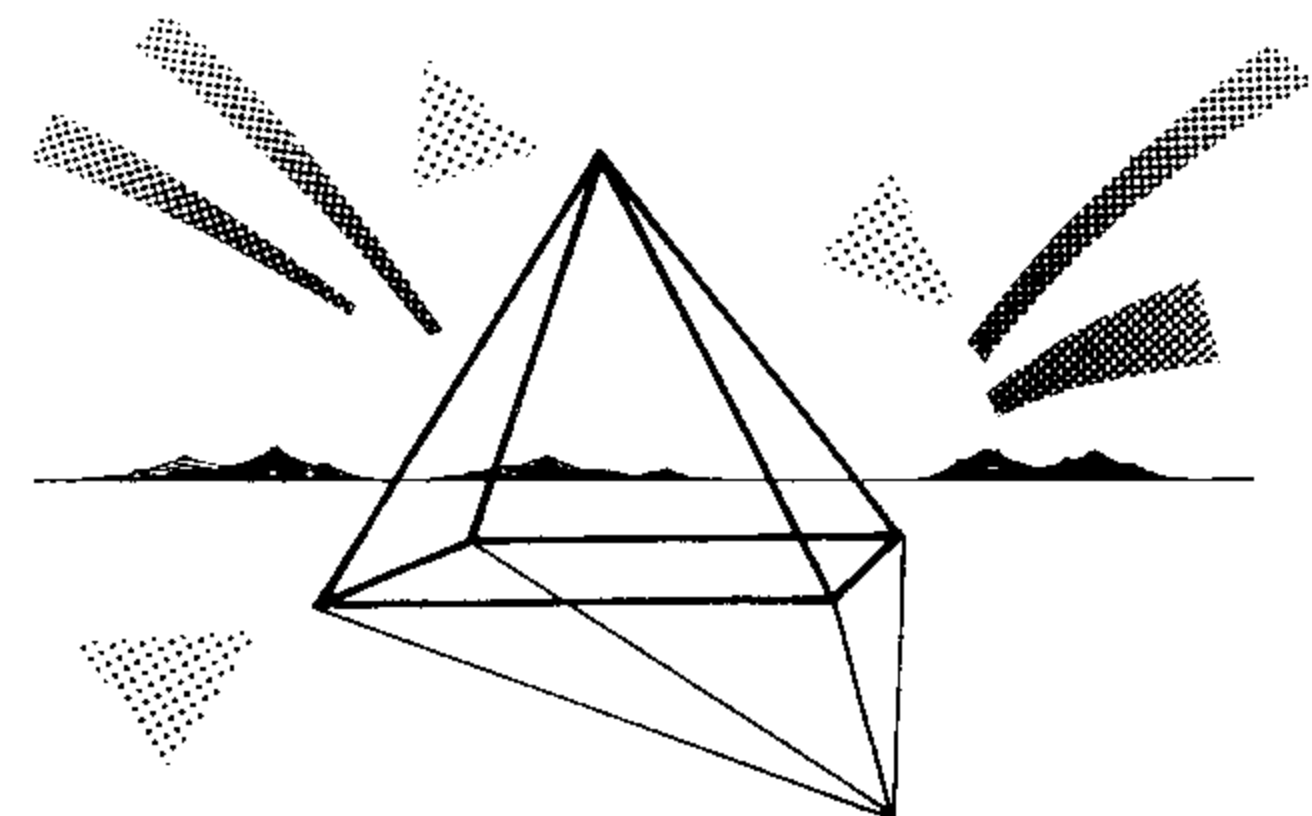
仕事です。照明の岩崎電気株式会社にて20年間「紫外線」研究に携わり、退社後1年のリフレッシュ期間を置き、平成元年に会社を設立しました。45歳の手習いです。

“紫外線を活かす”ことを念頭に殺菌、水中有機物処理、インキや塗料の硬化・乾燥、焼き付け、脱臭・脱色など巾広い紫外線応用分野の内、ねらいを農業分野へ「蛍光式農薬散布量測定器」、自動車関連へ「水溶性切削液悪臭防止装置」と、オリジナルの製品化に成功し、いざこれからというときに“バブルの崩壊→不況”の洗礼を受けました。立ち会い試験までOK、しかし注文は来ずの繰り返し、世の中は思いどおりに行かないのが面白い所です。

大企業ならリストラ、不採算部門の切り捨てなどで対処できるであろうのに、何も無い小企業では、それからは紫外線のことなら何でも相談に乗りましょうということ、今はOEMを始め、紫外線ランプ1本まであらゆることを手掛けています。この不況の中、何とか会社を維持して行けるのは、埼玉大学関係者や出身高校関係者や友人知人が、ブレンとなり協力者となってくれることが大きく感謝の毎日です。

我が社がこんな状況でもトライしているテーマは、フロン廃止に伴う紫外線応用、水の純度を紫外線による連続測定、尿排水の処理装置、PC基板検査装置、排水脱色装置などなど、紫外線応用で産業界に寄与できるものがあればと夢を追う毎日です。

ところで、今年の新入社員が埼大電子工学科卒業生で池下兼光君、同窓会会報「さい久流」のように1回生の私から29期の彼とサイクルしたのと、会員便りを書かせていただいたのは偶然でしょうか……。



連載 会員だより

▶▶▶ その4

社会人として博士後期課程を修了して

共同印刷株式会社 技術本部
研究第一部 藤田 実

(電子78年度、電子修80年度、博士92年度)

編集長の仲江川さんより会報に載せたいので、私の埼大での博士課程終了の体験談を書いて欲しいとの要請があり、同窓会会員の皆様の何らかのご参考になればと思い、筆を取らせて頂いた次第です。

社内の埼大の求人担当者の都合が付かず、数年前から社内の埼大の求人担当から外れていた私が出身の研究室を年末のご挨拶のため久しぶりに訪れたのは平成2年12月のことでした。研究室は平塚先生が恩師杉本先生の跡を継承されており、学生時代に先生に直接実験をご指導して頂いた思い出話などを懐かしくさせて頂いた後、その年に学生を受け入れ始めた新設の理工学研究科のご紹介がありました。また、その時点では既に平成3年度の一次募集は終了していましたが、未だ募集人員に空きがあるので二次募集を1月に行うとのことでした。私は以前から杉本先生が大学院博士後期課程の新設に奔走されていたことは存じ上げていました。しかし、大手印刷会社は研究開発のほとんどを応用開発に主眼を置いており、学位取得者を必要としていないなどの風潮があり、十数年間磁気カードや光カードなどの材料の応用開発を中心に手懸けてきた私は学位取得のチャンスはないものと諦めていたのです。ところが、理工学研究科案内書と第2次学生募集要項を頂いて帰り、社に報告した数日後、突然担当トップより「学位取得者の第一号になって欲しいので、受験するように。」との指示があったのです。当時私はJR東日本の自動改札化に伴い導入が検討されていた自動改札機に直接投入できるプリペイドカード(現イオカード)の開発リーダーとして受注戦争の真っただ中であって、カードの設計・社内外の交渉などで多忙を極めており、とても学業と業務の両立が困難であると思われ、一旦は断ろうとしました。しかし、平塚先

生の親身の励ましがあり、自分自身の学位への憧れと社内の若手技術者の励みになればと思い敢えて決断し、入学試験を受けることを決意したのです。その時は3年で学位がとれなかったら切腹ものだなという心境でした。

それからの3年間は週7日のうち、授業がある時間帯を除いて月曜日と土曜日は大学に通い、残り4日は会社の方に勤務するように心掛け、研究室の学生とできる限り交流し、学業と会社の業務を両立させることに努力しました。学会発表の前の発表原稿や投稿論文作成は帰社後自宅で行いました。私の場合、会社の開発テーマと学位論文の研究テーマが異なっていましたが、平塚先生が優秀な学生を共同研究として付けて下さり、私の会社の業務に出来る限り支障が出ないように充分配慮して下さいだったので、実験や論文投稿も比較的順調に行う事が出来ました。しかし、体力には自信があったのですが、無理が祟ったためか最終年度の秋に胸膜炎になってしまい、通院して点滴を受けながら学位論文を作成することになってしまいました。それでも何とか期日迄に学位論文を提出し、無事審査を経て博士後期課程を修了することができました。一方、その間、仕事面ではJR東日本の技術コンペで同業他社より優れていることが認められ、イオカードを独占受注することができました。

以上のように紆余曲折を経て、何とか学位を取得できたことは今更ながら幸運でした。社会人として博士後期課程で学ぶには会社の理解と協力が不可欠ですが、それ以上に、埼大の出身研究室の先生に師事できたことが色々な面で好都合な環境であったと思われれます。

最後に、お世話になった先生方ならびに研究室の皆様にご心からお礼申し上げますとともに、今後ともご指導・ご教授下さいますようお願い致します。



連載 会員だより

▶▶▶その5

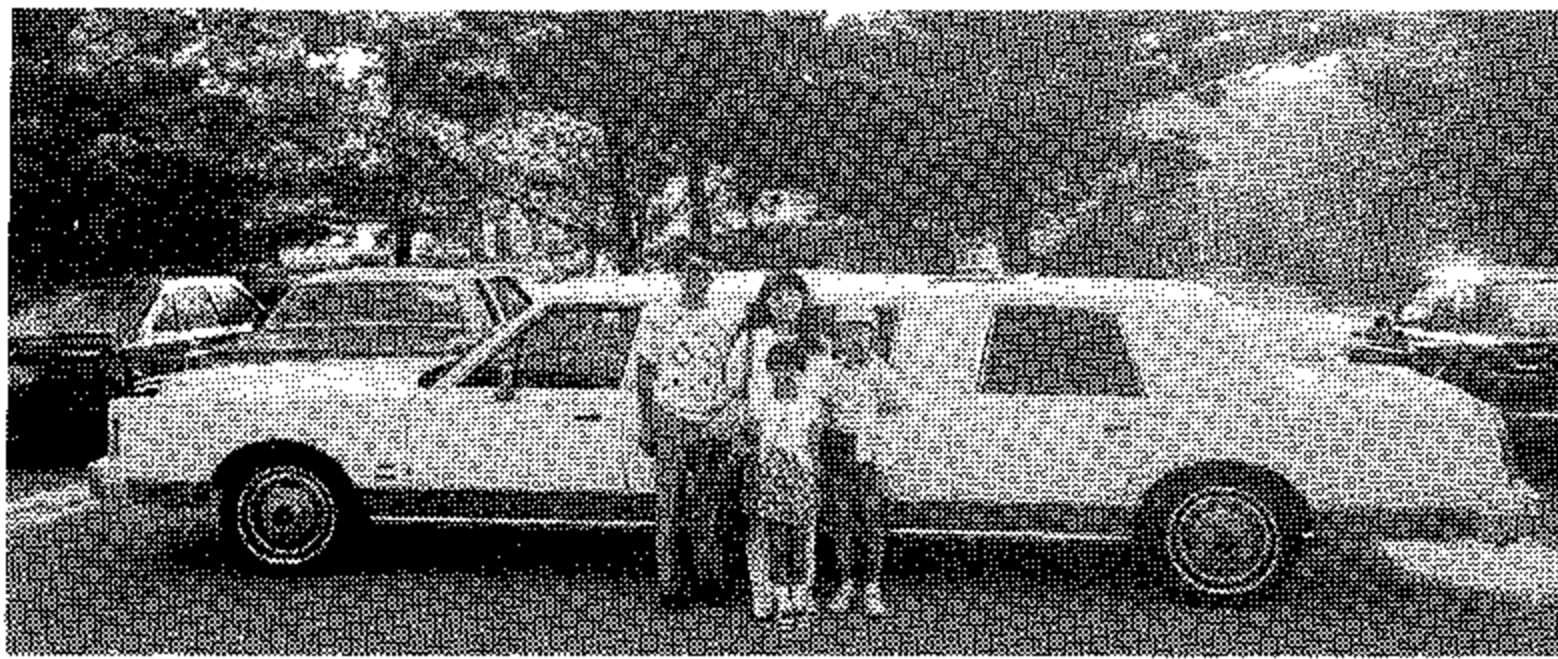
先生方の近況

イリノイ大学滞在記

荒木 純道 (電気70年度)

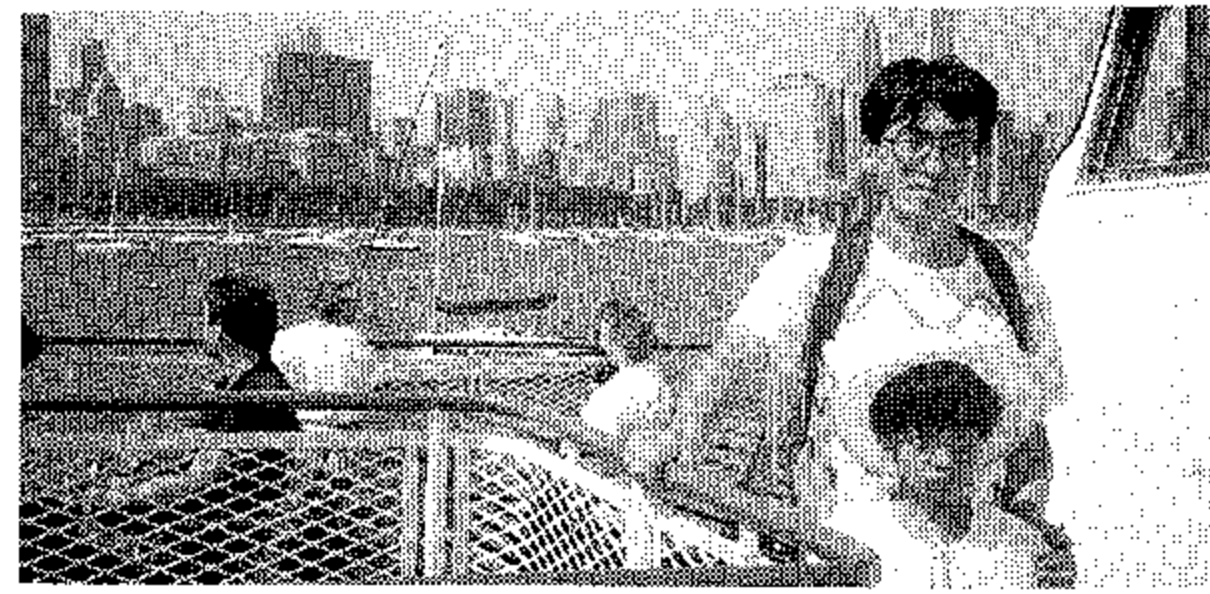
昨年6月から、今年の3月末まで、文部省海外研究員としてイリノイ大学電気計算機工学科に10ヵ月滞在し、アメリカにおける研究・教育の実態をつぶさに見てきました。この間日本では細川内閣の誕生や米の部分自由化など、未曾有の大変革があったそうですが、アメリカではそれ程のニュースとしては報道されていませんでした。(日米経済交渉が決裂した時には、大きく取り上げられました。)それにしても、アメリカの農業人口は1%足らずで、米作農家は更に少ないはずなのに、何故、あんなに強い政治圧力を持ち得るのでしょうか?不思議です。

イリノイ大学は、シカゴから南へ130マイル位行った所にあります。(ちなみに、シカゴは五大湖の1つミシガン湖のほとりにある全米第3位の大都市です。都心の再開発がうまくいって、ニューヨークに比べるとはるかにキレイで安心。アル・カポネが活躍していたとは信じられないくらいです。それと、五大湖の広さ。私の子供たちは、海だと信じて疑いませんでした。)シカゴからは、見渡す限りのとうもろこし畑と、大豆畑が延々と続きます。1度リムジンをチャータしてシカゴまで往復しました。



シカゴからリムジンで

イリノイ大学のあるアーバナ・シャンペーンは典型的な大学都市で、全人口(10万)の8割近くが大学に関係しています。飛行場も、ゴルフ場も大学所有のがあります。大変立派なコンサートホールがあり、連日のように演劇、音楽会、展覧会が催されています。シカゴ交響楽団がこんな片田舎にもやって来ます。(多少高くなりますが、それでも入場料は5千円程)



ミシガン湖からシカゴのダウンタウンを臨む

平地なので、スキーはできませんが、冬はスケートが盛んです。冬季オリンピックで金メダル通算5ヶを獲得したボニー・ブレアはこの町の出身で、リレハンメルの際は、熱狂的な騒ぎでした。ブレア通りという名があるそうです。

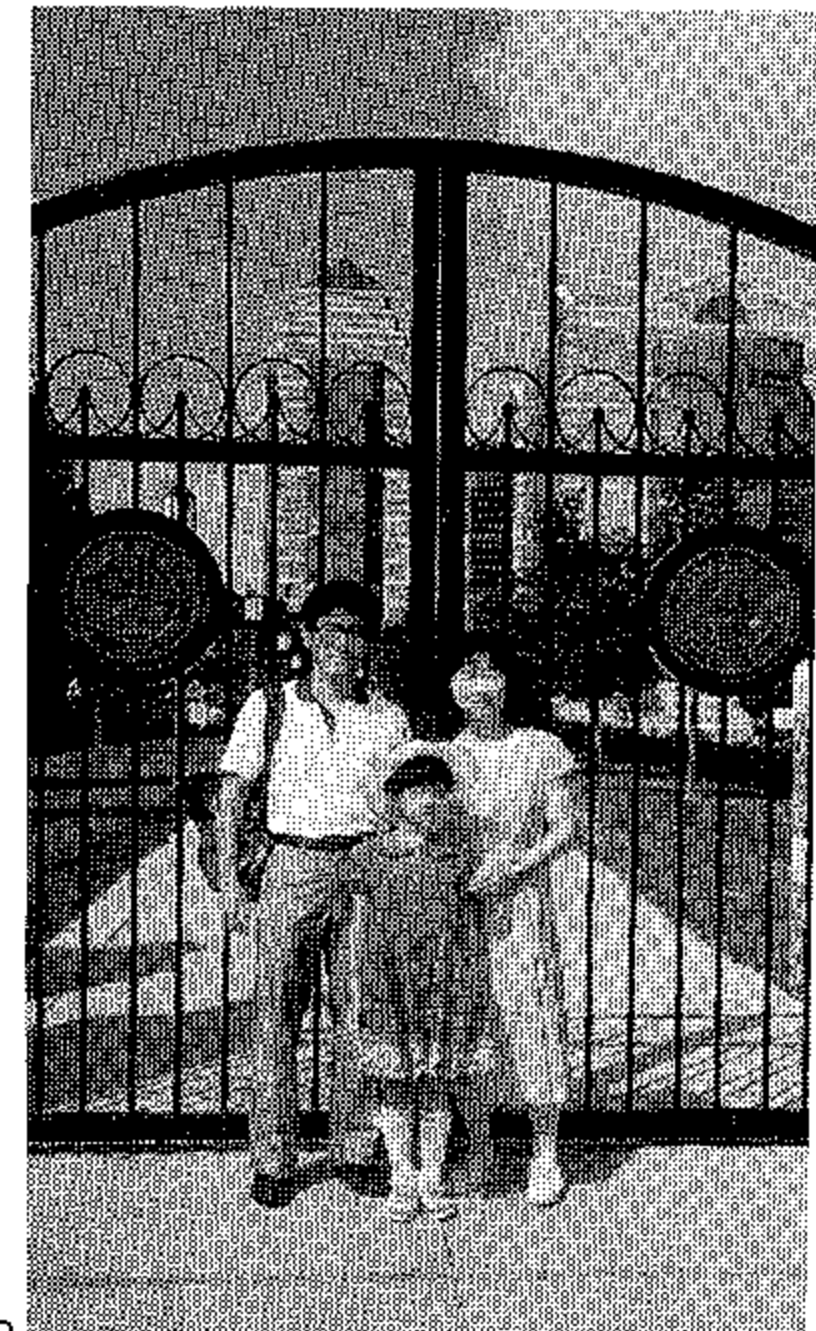
イリノイ大学には、世界中から数多くの学生、研究者が集まって来ます。私も、様々な国、人種の人と知り会えました。有名な物理学者、ニールス・ボアの孫、ヘンドリック(彼の祖父と父は共にノーベル賞をもらっている)とは、ビデオデッキをガレージセールするのがキッカケで知り合いました。

今年の冬は、記録的な寒波に襲われました。体感温度-40度。想像を絶する寒さでした。大学からは凍傷予防のパンフレットが回って来ました。ついに郵便配達も中止になりました。

(配達も命がけですね)13年前、テキサスへ研究員として滞在していた時は、大変な熱波で、牛や老人がバタバタ死んでいった記憶があります。全くアメリカは広い!

イリノイ大学に限らず、アメリカの大学院生はよく勉強します。朝9時から夜12時頃まで、しかも土、日も研究室に来ています。殆ど遊んでいる所を見たことがありません。大学院講義の厳しさも影響しているのでしょうか。(研究所には、学部学生がいなかったもので、学部生の実態はわかりませんが、似たようなものでしょう)ゆっくりと新聞を読む暇もないような感じでした。

僅か10ヵ月ではありましたが、日本の大学における研究教育をすすめていく上でいろいろ参考になることがあり、今後それらを生かしていきたいものです。



イリノイ大学CSL研究所の門の前で

■ 研究室案内

今回は、旧電子工学科の竹内研と中川研を紹介いたします。

竹内研では一貫して放射線のパルス計測を中心とした種々な計測回路に関する研究に取り組んでいます。研究室で開発された微分直線性、積分直線性にすぐれた超高速、超精密パルス計測回路の性能は、とどまる所を知りません。

一方、中川研では、赤外から紫外にかけての光計測技術ならびに回路システムを研究しています。また、それらの応用技術や農業への電子回路技術の適用などユニークな研究(さく乳量の自動計測、農薬の散布量etc。)を行っています。

なお、中川研の助手でした谷治先生は、総合情報処理センターの助教授として現在御活躍です。

荒 木 純 道 (電気70年度)

平成5年度 事業報告

- 平成5年5月15日 第一回役員会
第一回 さいくるVol.5
編集委員会
- 6月12日 第二回 役員会
第二回 さいくるVol.5
編集委員会
- 6月19日 さいくるVol.5 (総会
案内) 発送業務
- 7月17日 平成5年度総会及び懇親会
(於: 埼玉大学)
- 10月 工学部名簿発送
- 平成6年2月 新会員名簿整理
- 3月 卒業生への同窓会名簿販売
- 3月22日 卒業生謝恩会への寄付

平成5年度 総会報告

電気電子同窓会の平成5年度定期総会が、平成5年7月17日(土)午後、埼玉大学の大学会館において開催されました。

荒牧副会長の開会挨拶、村田会長の同窓会活動の概況等についての報告に引き続き、村田会長を議長として議事が進められました。

議題としては

- (1) 平成4年度事業報告
- (2) 平成4年度決算報告
- (3) 役員改選
- (4) 平成5年度事業計画(案)
- (5) 平成5年度予算(案)

等で、いずれも満場一致で承認されました。

特に、役員改選では、副会長が荒牧さんから中沢に、会計が鎌田さんから金杉さんに交代することになりました。

また、学生への働きかけの一つとして、学生交歓会費を卒業生謝恩会への寄付に振り替え、それを今後も引き続き行うことで合意されました。

懸案になっている会員と学生の交流会については、今後どういうやり方がいいのか会員の皆さんからアイデアを募りたいとの説明がありましたが、来賓の杉本先生からは、卒業生は基本的に会社がバックにあり、公平さを保つという観点からは就職活動は講座の先生を通して行うのが本筋であるとの御指摘もありました。

総会后、会館2階のきゃら亭にて懇親会が行われ、先生方を囲み、現役学生も交えて、話が弾む、楽しいひとときを過ごしました。

中 沢 孝 (電気76年度)

